

## 英文毎日 Web 版記事 日本語訳 (翻訳 万延元年遣米使節子孫の会)

### 万延元年遣米使節子孫の会が東京の記念碑に英語版パネルを寄贈

December 30, 2020 (Mainichi Japan)

東京——1860年に初の外交使節団としてアメリカに渡った77人のサムライの子孫の会が東京都に歴史的派遣の記念碑の英語版パネルを寄贈した。

新しいブロンズパネルは何十年も前に港区芝公園に設置された日本語の記念碑の前に設置された。記念碑は1960年に初のアメリカへの外交使節の派遣を記念して建立された。その石碑は使節団が徳川幕府により派遣され、日米修好通商条約の批准書の交換の任務を委任され米軍艦ポーハタン号で太平洋を航海したと紹介している。



2020年5月13日万延元年遣米使節子孫の会理事、宮原万里子氏は、港区芝公園に設置されている遣米使節団の記念碑英語版パネルの寄贈目録を東京都東部公園緑地事務所の寺島綾子氏に手渡した。



港区芝公園にある日米修好通商条約100周年の記念碑の右下に英語版パネルは設置されている。

使節団は、米国の地に足を踏み入れた途端、日本からの外交使節団として祝砲、パレード、祝宴で出迎えられ、当時のジェームス・ブキャナン大統領に謁見した。一行はサンフランシスコからパナマを経由して、ワシントン、フィラデルフィアからニューヨークへと各地を訪問した。目的が二か国の通商条約の批准書の交換ではあったが、代表団は近代技術や文化も多く母国に持ち帰ったとともに、アメリカ国民に長く語り継がれる印象を残した。この訪問は二か国が1861-1865年の南北戦争と1868年の明治時代への社会変革という国内の大きな混乱に直面するわずか前のことだった。

子孫の会はこの春英語版のパネル設置の除幕式を開催する予定だったが、新型コロナウイルスより中止となった。2020年5月13日によやくパネルが東京都に寄贈されたとき、首都は緊急事態宣言下にあり、有名な東京タワーや徳川家の菩提寺である増上寺の近くに設置されている記念碑の前には子孫の会の代表者と都の職員の人だけが立ち会った。それは1860年のミッションの100周年にあたる60年前、当時の駐日アメリカ大使であり、連合軍最高司令官ダグラス・マッカーサー氏の甥にあたるダグラス・マッカーサー2世、東京都知事、多くの子孫が出席した1960年の式典での記念碑除幕式と比べるとかなり控えめな光景だった。1960年当時の式典は新聞やテレビで話題になり、100周年を記念した伊勢丹や阪急百貨店での子孫所蔵品の大規模な展示会などのイベントや宴会、音楽コンサート、クルーズイベント、公共放送のNHKによるテレビドラマまで制作された。

使節団の副使村垣淡路守範正(1813-1880)の玄孫宮原万里子氏(65)は、1960年6月27日、当時5歳だったが、着物を着て範正の曾孫である父村垣正澄氏(97)に連れられ、芝公園での除幕式の際、紐を引いて記念碑を覆う白い幕を開いたことを覚えている。父は村垣家を代表して式典に招待を受けた際、誰か除幕する女性がいるか尋ねられ、5歳の娘を推薦した。突然の大役を任命され、急遽親戚から着物を借り、近所の大叔母にきれいに着付けをしてもらい臨んだ。宮原氏は式典でダグラス・マッカーサー大使が「まりこさーん」と自分の名前を呼び握手してくれた手が大きく毛むくじゃらだったことを覚えているようだ。



左: 記念碑の前に立つ東京都職員寺島綾子氏(写真中央)、万延元年遣米使節子孫の会理事、宮原万里子氏(左)村山彰一氏(右)



中央: 1960年の式典で除幕した宮原万里子氏(当時5歳)と父村垣正澄氏  
右: 2020年5月24日、記念碑の前に立つ正澄氏

幼かった宮原氏はアメリカのことは何も知らなかったものの、当時の日本社会は日米安全保障条約の改正を巡って混乱していたため、これらのイベントの多くは日米の友好関係を強調し、その不安を鎮めるために開催されたものと推測している。マッカーサー大使が除幕式で行った演説にもこの目的を垣間見ることができるし、当時のドワイト・アイゼンハワー米国大統領が予定した来日が中止されたことも背景にあるのではと彼女は言う。

2010年の万延元年遣米使節子孫の会の発足以来、宮原氏は理事として日本の近代外交に果たした使節団の役割を世の中に正しく伝える努力を続けていると語った。子孫の会としてこれまでにワシントン、ハワイなどの先祖ゆかりの地を日本や海外も含め訪れ、米国国立公文書記録管理局、スミソニアン博物館などで1860年の使節団に関する多くの文書や遺物を調べてきた。彼らはまた、先祖が下船したワシントンのネイビーヤードに記念碑を建て、彼らの先祖が1世紀以上前に滞在した首都にあるウイラードホテルに滞在もした。子孫の会の会員は当時の使節団を歓迎したアメリカ側の子孫たちとも交流した。現在使節団員の子孫63人が会員登録をしており、うち2人はアメリカに在住している。



左：1860年ワシントンのネイビーヤードで米国軍人と使節団 村垣孝氏所蔵写真  
前列右から三番目正使新見豊前守正興、左から三番目副使村垣淡路守範正、  
右から二番目目付小栗豊後守忠順



左：村垣淡路守範正  
村垣孝氏所蔵写真



左：村垣正澄氏所蔵の1960年開催された日米修好通商100周年記念展で発行されたカタログと記念切手、三使節の写真

子孫の会は今年、1860年の使節団派遣160周年と子孫の会発足10周年を記念して30cmx40cm、高さ60cmの英語版パネルを東京都に寄贈することを決め、開催される予定だった東京オリンピック、パラリンピックの際に海外から日本を訪れる多くの旅行者の理解の助けになればと願った。

2018年の夏、各地の史跡の多くに最近設置されたパネルの多くが英語、時には中国語に翻訳されていることに気づき、東京オリンピック・パラリンピックに先駆けて設置されたのではないかと、使節団の記念碑にも教育委員会などの公的機関によって英訳版が設置されてもいいのではないかと考えた。2年後、村垣淡路守範正の玄孫であり、子孫の会の名誉会長である村垣孝氏による翻訳に専門家の校閲を受け英語版パネルはついに設置された。パネルには副使村垣淡路守範正が出航にあたって竹芝ふ頭からポーハタン号へと船出した際に詠んだ歌、「竹芝の浦波遠くこぎ出でて、世に珍しき船出なりけり」と書かれている。

「来年、コロナウイルスの危機が過ぎ去ったあと、私たちは5月に除幕式、船上パーティーなどのイベントを開催したいと思います。」と宮原氏は語る。「来年、東京大会に海外から来日する多くの人に、これまで続く日本の近代的な国際化の先駆けとなった1860年の使節団の功績を知ってもらいたい。」

(毎日新聞 吉田哲子)

※記事のインタビューは2020年12月に行われたため、イベントは2021年5月に延期を想定していたが、今秋以降に再延期した。

2021年5月15日